D-project 公開研究会

資料集

主催　　一般社団法人　デジタル表現研究会

D-projectがめざすもの

中川一史（D-project・会長／放送大学・教授）

キチンと文化からの脱却

現在、授業でICTを活用することによって、学力がどう上がるかという議論がよく聞かれるようになりました。それ自体はけっして悪いことではありません。現に、ICT環境を充実させるために、議会などの説得などで「ICTで学力がたしかに上がったデータ」のほしい教育委員会担当者は、後をたたないようです。しかし、ここで取り上げられる学力というのが、どうも「学力＝狭い意味での基礎・基本」ととられ、この部分ばかりが目立っています。つまり、キチンと「知識・理解」や「技能」を習得することを重視しているわけです。しかし、学力というものは、このような側面ばかりの話ではないし、その部分だけがICTの出番ではないはずです。

2007年11月に出された中央教育審議会教育課程部会「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」によると、学習指導要領の理念である「生きる力」がこれからも必要であるとしています。その上で、課題の１つとして、「各教科における知識・技能を活用する学習活動が十分ではなかったことから、各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間での課題解決的な学習や探究活動との間の段階的なつながりが乏しくなっていること」をあげています。つまり、「習得型」「探究型」の間に「活用型」の授業をおいて、表現力や思考力、判断力の育成の必要性を述べているわけです。しかし、実際の授業では、理想とはうらはらに、それらが充分に子どもたちに育っていない場面を目にすることが少なくありません。

この点においては、日本の教育界に根強い「キチンと文化」がすべての根源にあるように私は感じています。

たとえば発表場面なら、「準備した」原稿を暗記し、「大きな声でキチンと」間違いなく読めたかを重視して評価しています。「今の時期では、まずは発表原稿をきちんと読めることがこのクラスの実態からは大事です。」という主張は、もっともなことですが、半年後にそのクラスにうかがってもまだ同じようなことから脱していないことが多いのです。結局、相手が誰であるかとか、伝えたい内容がどう伝わったかの効果などの検討は二の次。その結果、友だちの発表を聞いた子どもの感想も「声が大きくて良かったと思います」に終始してしまう。このやり方では、プレゼンの仕方の基礎・基本の徹底はできても、実際に活用できる視点を子どもたちはもつことができません。

キチンと文化から脱却するのは、けっして平坦な道ではないし、ましてや授業がスマートに進むことはむしろ少ないと思います。時には課題そのものが、時には共同制作をしている友達が壁となってその先を阻みます。しかし、そのことで今自分が何をしようとしているのか、これからどう考えなくてはならないのかを見つめ直す機会となります。よく「活動あって学びなし」と言われる学習の一番の原因は、「何のために今この活動をしているのか」ということが、子どもの中で、あるいは教師自身の中で、あやふやになっていることにあるのです。活動を進めながら、あらためてこれらを明らかにできるような「しかけ」や「場の保証」が十分なされることが重要だと考えます。表現するためには思考・判断が不可欠であり、それを充実させるための表現学習の授業設計が重視されているのです。

D-projectとは？

D-projectは、「デジタル(Digital)」「デザイン(Design)」の２つの『D』をキーワードに、ICTにふりまわされることなく、子どもの学びをみつめて授業をデザインしていこうとする姿を提案したいという願いから2002年４月に発足しました。現在、全国の教師、教育委員会、その他教育関係者、大学の研究者、学生を中心に、プロジェクトやワークショップを通してさまざまなテーマに取り組んできました。そこで明らかになったのは、このような取り組みは子どもたちの発想力や企画力、表現力といった「豊かな学力」の育成に有効だということです。

2006年度からスタートしたD-project２は、「豊かな学力」と「メディア表現」を結びつける「メディア創造力」というキーワードを今後の活動の柱にしてきました。「メディア創造力」とは、「表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、柔軟な思考を働かせながら自己を見つめ、切り拓いていく力」と定義しています。さらにメディア創造力をどの観点でどの程度達成すれば良いのかがわかるアウトカムも作成しました。（※詳しくは、後のページを参照ください。）

「メディア創造力」の育成という新たな視点で授業づくりを考え、映像と言語の往復や実際に活用できる力とは何かということなどに着目しながら、日本の学校教育界に根強い「キチンと文化」に対して問題提起していきたいと考えています。

シンボルマークについて

ぴったりと寄り添い、教育の未来に向かって笑顔を向ける、２つのD。小文字の「d」は子どもの姿を、大文字の「D」は教師の姿をイメージしています。人間性豊かな教育観をあらわすために、手描きタッチのフォルムを活かし、D-projectの温かな体温を感じてもらえるように造形しました。彼らの名前は、ディジーとデジー。デジタル（表現）＆（授業）デザインの世界を道案内する名コンビ、といった役どころです。ディジーとデジーは、今後D-project活動のさまざまな場面で、皆さまにお会いします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

【D-project Webサイト】http://www.d-project.jp

D-projectの活動

D-projectの活動は、「深める」「広げる」「つなげる」の３つの柱で構成されています

深める　実践研究活動とプロジェクト

「メディア創造力」を育成する新たな授業プランを開発したり、実践について検討したりしています。D-projectWebサイト（http://www.d-project.jp）では、「メディア創造力実践ガイド」として、「ニュース番組づくり」「新聞づくり」「リーフレットづくり」「絵本を読み解く」の国語科の４つの実践について、詳細に授業の流れを示しています。今後まだまだ増えていきます。

また、D-projectでは、子どもの学習に直結するようなテーマや教師の実践研究のために、「プロジェクト」を企画・運営しています。メンバー限定のものもありますが、広くD-projectに参加する教師（学校）ならどなたでも参加できることを原則としています。

2011年度のプロジェクトは、以下の15です。

【子どもの学習のためのプロジェクト】

- ４コマスライド
- デジタルストーリーテリング
- ニュース番組制作
- フォトポエム
- ユネスコ寺子屋
- 国際交流学習
- 私のまちのたからものコンテスト
- 子どものプレゼン力育成
- 新聞制作
- ネットdeカルタ
- 図工系アナログチックな学習プロジェクト

【教師の実践研究のためのプロジェクト】

- 「授業における写真活用術」電子書籍化プロジェクト
- iPad実践活用、デジタル教材開発研究プロジェクト
- メディア創造力アウトカム検討プロジェクト
- 情報リテラシープロジェクト

広げる　公開研究会とワークショップ

D-projectでは、年に一度の全国大会（春の公開研究会）と地域大会（夏の公開研究会）を行っています。公開研究会では、基調講演やワークショップ、総括パネル、賛助会員や協力企業による情報提供など、盛りだくさんな内容で、新たな情報を得たり、全国の教育関係者とのヒューマンネットワークをつくることができます。

また、もっと小規模にもっと定期的に開催されているのがワークショップです。内容や定員をぎりぎりまでしぼり、全国各地でコンパクトに開催しています。さらに教育委員会との共催によるワークショップも実施しております。

つなげる　Webサイト・メールマガジンとメーリングリスト

また、Webサイトやメールマガジンで活動の最新情報を提供するとともに、現在約550人が参加しているメーリングリストで情報共有も行っています。また、ブログやFacebookなどで独自の発信を行っている地域D-projectもあります。ぜひあなたも、ご自身の「D」をいっしょに追究していきませんか？

メディア創造力の定義

表現学習を通して、自分なりの発想や創造性、柔軟な思考を働かせながら自己を見つめ、切り拓いていく力

メディア創造力の下位項目と到達目標

下の表は、メディア創造力に含まれる下位の能力項目を整理し、発達段階ごとに子どもの学習到達目標を示したものです。　メディア創造力は、A～Dの4つの力で構成されており、これらをバランスよく育むことが重要です。A～Dは、それぞれが３つずつの到達目標に分けることができます。その到達目標には、それぞれに段階（レベル）があります。ただし、小学校中学年は必ずLV２をやらなければならないということではなく、そのレベルに達していない場合には、LV１を含めて取り組む必要があります。

メディア表現学習は、単に作品の完成を目指すものではなく、ここで示したことを学ぶことが目標です。この学習到達目標を達成するための授業をデザインすることでメディア創造力を育むことができると考えています。

メディア創造力下位項目／到達目標		1.　社会とのつながりを意識した必然性のある課題を設定できる	2.　基礎・基本の学習を課題解決に活かせる	3.　好奇心・探究心・意欲をもって取り組める
A. 課題を設定し解決しようとする力	Lv1: 低学年相当	人や自然との関わりの中で体験したことから課題を発見できる。	文章を読み取ったり，絵や写真から考えたりする学習を活かすことができる。	何事にも興味をもって取り組むことができる。
	Lv2: 中学年相当	地域社会と関わることを通じて課題を発見できる。	グラフを含む事典・図書資料で調べたり，身近な人に取材したりする学習を活かすことができる。	自分が見つけた疑問を、すすんで探究することができる。
	Lv3: 高学年相当	社会問題の中から自分に関わりのある課題を発見できる。	アンケート調査の結果を表やグラフで表したり、傾向を解釈する学習を活かすことができる。	課題に対して、相手意識・目的意識を持って主体的に取り組むことができる。
	Lv4: 中学校相当	社会問題の中から多くの人にとって必然性のある課題を設定できる。	独自の調査を含め、情報の収集方法を選んだり、組み合わせたりする学習を活かすことができる。	社会生活の中から課題を決め、相手意識・目的意識をもち、主体的に取り組むことができる。
	Lv5: 高等学校相当	グローバルな視点をもって、多くの人にとって必然性のある課題を設定できる。	様々な方法で収集した情報を整理・比較・分析・考察する学習を活かすことができる。	課題解決に向けて自ら計画をたて、相手意識・目的意識を持って主体的に取り組むことができる。
メディア創造力下位項目／到達目標		1.　構成要素の役割を理解できる（印刷物：見出し、本文、写真等映像作品：動画、音楽、テロップ等）	2.　映像を解釈して、言葉や文章にできる（映像：写真、イラスト、動画等）	3.　制作物の社会的な影響力や意味を理解できる
B. 制作物の内容と形式を読み解く力	Lv1: 低学年相当	制作物を見て，複数の要素で構成されていることを理解できる。	映像を見て，様子や状況を言葉で表すことができる。	制作物には、人を感動させる魅力があることを理解できる。
	Lv2: 中学年相当	制作物を見て、それぞれの構成要素の役割を理解できる。	映像の内容を読み取り、言葉や文章で表すことができる。	制作物には、正しいものと誤ったものがあることを理解できる。
	Lv3: 高学年相当	制作物を見て，構成要素の組み合わせ方が適切か判断できる。	映像の目的や意図を自分なりに読み取り、言葉や文章で表すことができる。	制作物には、発信側の意図が含まれていることを読み取ることができる。
	Lv4: 中学校相当	制作物を見て，構成要素を組み合わせることによる効果を理解できる。	映像の目的や意図を客観的に読み取り、言葉や文章で表すことができる。	制作物について，他者と自己の考えを客観的に比較し，評価することができる。
	Lv5: 高等学校相当	制作物を見て、送り手がどのような意図で要素を構成したのか理解できる。	映像の目的や意図を様々な角度から読み取り、言葉や文章で表すことができる。	制作物の適切さについて批判的に判断することができる。
メディア創造力下位項目／到達目標		1.　柔軟に思考し、表現の内容を企画・発想できる	2.　目的に応じて表現手段の選択・組み合わせができる	3.　根拠をもって映像と言語を関連づけて表現できる
C. 表現の内容と手段を吟味する力	Lv1: 低学年相当	自分の経験や身近な人から情報を得て、伝えるべき内容を考えることができる。	相手に応じて、絵や写真などの言語以外の情報を加えながら伝えることができる。	他者が撮影した映像をもとに、自分の経験を言葉にして表現できる。
	Lv2: 中学年相当	身近な人や図書資料から得た情報を整理し、伝えるべき内容を考えることができる。	相手や目的に応じて、図表や写真などの表現手段を選択することができる。	自分が撮影した映像をもとに、取材した内容を言葉にして表現できる。
	Lv3: 高学年相当	身近な人や統計資料から得た情報を整理・比較し、伝えるべき内容を考えることができる。	相手や目的に応じて、図表や写真などの表現手段を意図的に選択することができる。	自分が撮影し取材した情報を編集し、映像と言葉を関連づけて表現できる。
	Lv4: 中学校相当	様々な情報源から収集した情報を整理・比較して、効果的な情報発信の内容を企画・発想できる。	相手や目的に応じて、多様な表現手段を意図的に組み合わせることができる。	自分が撮影し取材した情報を編集し、明確な根拠に基づき映像と言葉を関連づけて表現できる。
	Lv5: 高等学校相当	様々な情報を結びつけ、多面的に分析し、情報発信の内容と方法を企画・発想できる。	情報の特性を考慮し、相手や目的に応じて、多様な表現手段を意図的に組み合わせることができる。	映像と言語の特性を考慮して、明確な根拠に基づき効果的に関連付け、作品を制作できる。
メディア創造力下位項目／到達目標		1.　建設的妥協点を見出しながら議論して他者と協働できる	2.　制作物に対する反応をもとに伝わらなかった失敗から学習できる	3.　他者との関わりから自己を見つめ学んだことを評価できる
D. 相互作用を生かす力	Lv1: 低学年相当	相手の考え方の良さや共感できる点を相手に伝えることができる。	相手の表情や態度などから、思ったとおりに伝わらない場合があることを理解できる。	他者との関わり方を振り返り、感想を持つことができる。
	Lv2: 中学年相当	それぞれの考えの相違点や共通点を認め合いながら，相談することができる。	相手の反応を受けて、どのように伝えればよかったか理解できる。	他者との関わりを振り返り、相手の考え方や受けとめ方などについて、感想を持つことができる。
	Lv3: 高学年相当	自他の考えを組み合せながら、集団としての１つの考えにまとめることができる。	相手の反応を受けて、次の活動にどのように活かそうかと具体案を考えることができる。	他者との関わりを振り返り、自己の改善点を見つめ直すことができる。
	Lv4: 中学校相当	目的を達成するために自他の考えを生かし、集団として合意を形成できる。	相手の反応から、映像や言語における文法を身につける必要性を理解できる。	他者との関わりを振り返り、自分の関わり方を評価し、適宜改善することができる。
	Lv5: 高等学校相当	目的を達成するために議論する中で互いを高めあいながら、集団として合意を形成できる。	相手の反応から、文化や価値観を踏まえた表現の必要性を理解できる。	他者との関わり方を振り返り、自分の個性を活かすために自己評価できる。

6年生　国語科　「ようこそ、わたしたちの町へ」

横浜市立北方小学校　鳥越 和貴

■ 本時の目標・概要

取材してきたことをもとにして、載せる材料を選び、パンフレットの構図を考える。グループごとに、本物のパンフレットを参考にしながら、写真の大きさ、文量などを検討するために割り付けを考え、デザインの良さや改良点を交流する。パンフレットはグループで１冊作成する。

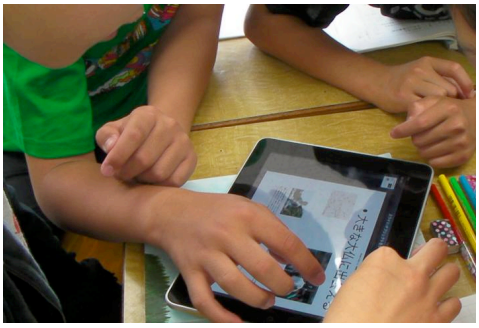
■ iPad活用のポイント

アプリはKeynoteを使い、教師側で作成したテンプレートのデータを入れておく。そのテンプレートデータを実際に操作しながら写真の配置や見出しの場所、リード文の場所を、実際に操作しながら検討していく。作成した割り付けは大型テレビにコネクタを使って接続し、検討結果を学級全体で共有していく。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
使いたい写真と記事を確認しよう	使いたい写真や記事の内容がどのくらいの量かを確認する	・どの写真を使うか、どの内容を伝えるかの確認を行わせる。 ・簡単にノートに案を書かせ、自分なりの考えと根拠を持たせる。
自分の割り付け案をノートに書こう	見出し、リード文、写真などをどのように配置するか、割り付け案をノートにメモ程度に書き、自分の考えを持つ	
iPad上で実際に操作しながら構図を説明し、検討しよう 検討したものを発表しよう	**iPadのサンプルを実際に操作し、どのように見えるのかを確認しながらグループで割り付けの検討を行う** **グループごとに検討した割り付けを大型テレビに投影して、割り付けた理由を発表する**	・iPadのサンプルを実際に操作しながら割り付け案を説明し、グループで検討を行わせる。 ・どの情報を大きく扱うか、それはなぜなのかという視点を中心に検討を行わせる。
本時の学習のふりかえりをしよう	自己評価を記入する	

■ 実践の様子や子どもの作品



6年生　図工科　「顔の方向を意識して描こう」

和歌山市立藤戸台小学校　本岡 朋

■ 本時の目標・概要

顔がある絵を描く機会は多い。しかし、子どもたちの絵を見ると、描かれているどの顔も同じ方向を向いていることが多い。そこで、本時では、顔の向きを意識した描き方を習得するために、顔写真を用い、実際に十字線を書き込みながら目や鼻の位置、実際の見え方などを意識させた。

■ iPad活用のポイント

・実際に自分や友だちの顔で学ぶことができる。
・写真の配布が容易（DropBoxを活用）
・iPad２なら、撮影―書き込みまでがすぐにできる。（書き込みにはFotolr写真編集HDを活用）

■ 展開

課題	学習活動	留意点
顔の向きの描き方を知ろう	十字線の描き方を知る **写真を取り込み、十字線を元に、目・鼻・口などの顔のパーツの位置や形がどうなっているか考えあう**	**正面・上から・下から・斜めから・横からそれぞれの視点の写真を用意して、顔のパーツの位置関係を考えさせたい**
実際に描いてみよう	自分が描きたい方向を向いている顔を用紙に描く	学習したことを元に、自分の描きたい方向の顔を描くことができるように視点を持たせたい

■ 実践の様子や子どもの作品

6年生　総合的な学習の時間　「世界を旅しよう」

和歌山市立藤戸台小学校　本岡 朋

■ 本時の目標・概要

外国語活動を行うにあたって、子どもたちに、まずは様々な世界に対する興味関心を日常の生活と比較することを通して持たせたい。そこで、主体的に世界の様子や町並みなどを見る活動を行った。

■ iPad活用のポイント

子どもたちに世界の様子や町並みを見せるには、様々な写真に解説や図なども豊富に記述されている図書の利用が一番に考えられる。しかし、写真だけに注目すると提示されたものであり、より主体的に見ることは難しい。そこで、iPadの「マップ」でGoogleストリートビューを活用すれば、まわりを見渡したり、自由に進みたい方向に進むなど、子どもたちが自分なりの興味にそって主体的に世界を感じることができる。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
世界で知っている国ってどんな国？どんな人が住んでいるんだろうね？	知っている国について出し合う	自由に出させたい
実際に、世界のいろいろなところを見てみましょう また、日本と違うところや同じところも見つけてみましょう	**マップの使い方を知る** **iPadのマップを使って、興味のある場所をお互いに情報交換しながら閲覧する**	※学校の近くの様子を再確認することで、視点を明確にしたい 世界の象徴的な場所を予め用意しておく 気になったところは、スクリーンショットを撮り写真フォルダに保存させる
日本と違うところや同じところはあったかな？	気付いたことを出し合い、思ったことを交流する	気付いたことなどをプロジェクターで提示しながら発表する

■ 実践の様子や子どもの作品

５年生　国語科「のはらうた」を使った詩の授業

熊本市立託麻北小学校　山口 修一

■ 本時の目標・概要

工藤直子さんの詩「のはらうた」を使った詩の授業。「のはらうた」の詩を提示し、誰になったつもりで書いたかを文を根拠に考えさせる。児童は工藤直子さんは誰になったつもりで書いたかを教材文の中にヒントを求めようとする。つまり教材に深く関わろうとしてくる。そして自分たちの既有知識を生かして考えるようになる。

教材文を画像としてiPadに取り込んでおき、班に１台のiPadを配布して活動させた。班で話し合いながら、根拠になる文に手書きでラインを引くようにさせる。最後にiPadをプロジェクターにつなぎ、自分たちの考えた根拠となる文にラインが引かれた教材文をスクリーンに写して班の考えを発表させた。

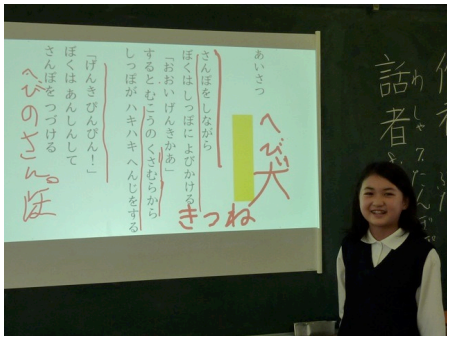
■ iPad活用のポイント

iPadに表示された教材文を班の全員で見ながら、根拠となる文はどれかを話し合うことができる。そして、話し合った根拠となる文に手書きでラインを引いたり、修正したりが簡単にできる。最後にスクリーンに大きく表示し自分たちの考えを発表できる。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
・提示された詩を読み、誰になって書いたか作者を考える。 ・班で話し合いながら、根拠となる文にラインを引く。 ・スクリーンに写して、作者は誰か、なぜそう考えたかを根拠となる文を示して発表する。	・作者の部分を隠した状態の詩をプロジェクターで提示する。 **・提示したものと同じものをiPadに入れておき、それを見ながら話し合う。** **・根拠となる文に手書きでラインを引くようにさせる。** **・班ごとにiPadをプロジェクターにつなぎ、詩を表示して発表させる。**	・プロジェクター、教師用iPad ・教材となる詩をneu.Notes で表示できるようにしたiPadを班に１台ずつ

■ 実践の様子や子どもの作品



高校1年 英語・情報「英語で伝える自己紹介とビデオ編集」

羽衣学園中学校・高等学校　米田 謙三

■ 本時の目標・概要

アメリカの生徒との交流活動をとおして、異文化に触れ、理解を深め、さらに興味・関心を高める。また、英語を使った交流により、英語で自分の考えを表現し、相手の考えを聞き取って理解する英語力を身に付ける。そして、これらのコミュニケーションを通じて、自分の考えを簡潔にまとめ、相手にわかりやすく表現することや、相手の話している内容などを確実に理解するといった実践的なコミュニケーション力を習得する。加えて、iMovieをはじめとするコンピュータのソフトウェアや、コンピュータそのものに触れ、操作することで、IT機器に親しみを持ち、ITスキルを身につける。

またiPad２のFacetimeアプリやiChat Theaterの機能を利用して、ビデオ会議を効果的に実施する能力を身につけると同時にCMSを活用した掲示板機能を使いこなすことができるようにする。

■ ICT活用のポイント

【1】交流相手校の生徒に自身の興味・関心などを簡潔にWebにまとめ、そしてその内容を英語の文章に書き表すことができる。
【2】交流相手校の生徒のページにいつでもアクセスできる。
【3】撮影した動画のMac miniへの取り込みや、iMovieでの編集などの方法を理解する。
【4】英語を母語とする交流相手校の生徒が話す英語（自己紹介動画）を何度もいつでも聞き、内容を確認することができる。
【5】ビデオ会議を効果的に実施することができる。

■ ビデオ会議のテーマ

1）Greetings from Bergen Tech & Hagoromo　（ あいさつ ）
2） Students introduce painting(s) (theme is "eco")　（ 描いた絵の発表 ）

留学生も発表

3） Students ask about painting(s)　（ 質疑応答 ）
4） Hagoromo students (5 groups) would like to talk about ECO(less than 5mins per group)
（ エコの取り組み発表 ）
5） Begen Tech students might talk about the safe driving ad campaign
（ アメリカ側からのいくつかのテーマに関して発表 ）
6） Q & A based on communication over the project website, culture and etc...
（ 身近なテーマについて意見交換 ）

■ 展開

課題	学習活動	留意点
・交流相手校の生徒に自身の興味・関心などを簡潔にまとめ、そしてその内容を英語の文章に書き表すことができる。	・交流相手校の生徒に自身の興味・関心などを簡潔にまとめる。 ・話す内容を順序立てて構成する。 ・話す内容を英語で書く。	・デジタルメデイアのことを解説するようにする。 ・英語の語句の補足説明を実施する。 ・適宜内容を確認するようにする。
・交流相手校の生徒に自身の興味・関心などを英語で口頭表現することができる。 ・撮影した動画のMac miniへの取り込みや、iMovieでの編集などの方法を理解する。 ・英語を母語とする交流相手校の生徒が話す英語（自己紹介動画）を聞き、内容を理解する。	・考えた内容を英語で話す。 ・表現豊かにはっきりと英語で話す。 **・撮影した動画のMac miniへの取り込みや、iMovieでの編集などの方法を理解する。** **・自己紹介動画を能動的に聞く。** **・自己紹介動画を（繰り返し）視聴することで、相手が話している内容を理解する。** **・自己紹介動画を視聴することで、相手の興味・関心を理解する。**	・どのようにすれば相手によく伝わるかを考えさせる。 ・作業に困難のある生徒にグループで支援させるようにする。 ・英訳の時間は、適宜指導する。 ・英語の発表者のテーマを解説し、様々な考え方があることを指摘する。 ・海外に発信することを伝える。
・ビデオ会議で自分たちのプレゼンや内容を英語で発表する。	**・ビデオ会議の仕組みを理解する。** **・ビデオ会議でコミュニケーション能力をのばす。**	

■ 実践の様子や子どもの作品

5年生　国語科　季節の言葉「春から夏へ」

熊本市立託麻北小学校　山口修一

■ 本時の目標・概要

教科書で学習した後、実際にデジタルカメラで撮った写真から、自分の考える春から夏への季節感を表す写真を選び、その写真に合わせて俳句を作る。児童は自分のイメージを写真に表しているので、そのイメージに合う言葉を選び、俳句を作らせていくようにする。

班に１台のデジタルカメラとiPadを配布し、班で活動させた。班で話し合いながら撮ってきた写真を教師のMacBookのiPhotoに取り込み、班のiPadを接続して同期させ、写真をiPadにコピーした。その後、iPadにコピーした写真をそれぞれが見ながら俳句をノートに書いていった。最後に自分の選んだ写真に手書きで俳句を書き入れ、プロジェクターでスクリーンに写して発表した。

■ iPad活用のポイント

写真を選んだり、写真に手書きで文字を書き入れたりが簡単にできる。その写真をスクリーンに大きく表示して情報を共有しながらの発表ができる。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
教科書の俳句を詠み、写真のイメージをもとに俳句の表す季節を感じ取る。	教科書の写真をスクリーンに大きく写し、俳句の表す季節を共有できるようにする。	プロジェクター、ノート、PC
「春から夏へ」のイメージに合う写真をデジタルカメラで撮影し、それに合う言葉を使って俳句を作る。	写真を取り込み各班のiPadに同期させてコピーする。 iPadの写真を見てノートに俳句を書くようにさせる。	デジタルカメラ、iPadを班に1台ずつ
作った俳句を選んだ写真に手書きで書き入れ、スクリーンに映して発表する。	**できた俳句をiPadを使い、選んだ写真に手書きさせる。** **班ごとにiPadをプロジェクターにつなぎ、写真を表示して発表させる。**	neu.Notesに写真を読み込んで手書き

■ 写真

5年生　国語科　詩の構成を考える授業

熊本市立託麻北小学校　山口修一

■ 本時の目標・概要

工藤直子さんの詩「ピンときた」を使って詩の構成を考えさせる授業。「ピンときた」は三連十二行の詩である。一連四行で、視点が身近なものから外側に広がるような構成になっている。この詩を一行ずつバラバラにして提示し、それを並び替えさせる活動を通して詩の構成を考えさせることができる。

一行ごとにばらばらにした教材文をそれぞれ画像としてiPadに取り込んおく。班に１台のiPadと、一行ずつバラバラにした紙の教材文も配布して活動させた。班で話し合いながら、文を根拠に紙の教材文を並び替え、四行ずつ三連の詩に作り直させる。班の考えがまとまったら、iPadに取り込んだ画像の教材文を並び替え、発表の準備をする。iPadをプロジェクターにつなぎ、自分たちで並び替えて作った詩をスクリーンに写して班の考えを発表させた。

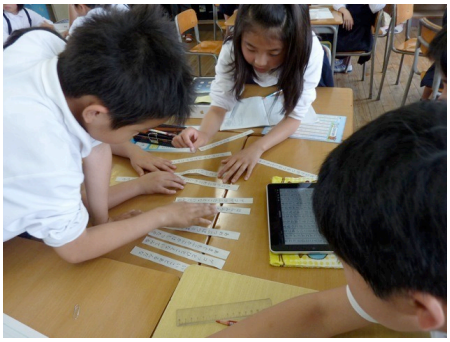
■ iPad活用のポイント

話し合いながら紙を使って 並び替えた結果を、iPadに取り込んだ教材文を並び替えることで大きく表示することができるようになり、自分たちの考えを発表することができる。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
提示されたバラバラになった詩を読み、詩の構成がおかしなことに気付く。	行をバラバラにした状態の詩をプロジェクターで提示する。	プロジェクター、教師用iPad
班で話し合いながら、バラバラになった詩を並び替え、正しい構成の詩にする。 iPadを使い、並び替えた結果を表示できるようにする。	一行ずつバラバラにした紙の教材文を配布し、話し合いながら並び替えられるようにする。	一行ずつバラバラにした紙の教材文とiPadのKeynoteを使った教材文
スクリーンに写し、なぜそう考えたかを発表する。	**並び替えの結果をiPadを使って表現させる。 班ごとにiPadをプロジェクターにつなぎ、並び替えた詩を表示して発表させる。**	

■ 写真



6年生　国語科　「パンフレットをつくろう」

和歌山市立藤戸台小学校　本岡朋

■ 本時の目標・概要

パンフレットづくりを行う。本時では写真などの配置について、まだ目が向いていない。そこで、レイアウト（写真や文字）の配置について、一人の子のパンフレットと作文を元にして「レイアウトついて制作過程において自分自身が工夫したり考えたことや、本物を分析しながら、考え合うことができる」「本物や自分のものと提案者のパンフレットにについて比べながら考えることができる」をねらいとして話し合いを行い、レイアウトについて考えを深め、改善を行いたい。

■ iPad活用のポイント

AppはKeynoteを活用する。プレゼンテーションソフトであり、充実したレイアウト機能を持つ。友だちのパンフレットデータをDropBoxを使って配布することで、一人一人が自分のiPadに持ち、加工・編集することができる。授業では、元のパンフレットと自分なりに改善したものを２台の大型提示装置を用いて比較したり、リアルタイムに編集操作をしながら、自分の考えを相手に説明させた。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
パンフレットづくりで、友だちの工夫した点や悩んでいるところについて知ろう	友だちの考えを知る	
自分なりに、友だちのパンフレットを改善しよう	**友だちのパンフレットを自分なりに加工・編集し改善する**	写真の大きさや位置など、どういう意図を持って決めたのかを意識させる
自分の考えを発表しよう	話し合う	友だちの意見を肯定的に捉え、いろいろな表現方法があることに気付かせたい **写真を移動させるところを大きく映し出すなどして、視覚的に自分の意図を伝えさせたい。**

■ 写真

6年生　社会科　「奈良の大仏に込められた願いを調べる」

和歌山市立藤戸台小学校　本岡朋

■ 本時の目標・概要

本時では、「大仏づくりは人々のために良かったのか？悪かったのか？」を課題について話し合う。大仏に込められた願いを聖武天皇や農民などいろいろな立場の人から話し合うことで、今後の歴史学習でも、一つの出来事に対しても様々な考え方があり、それぞれの立場に立って考えられる子になってほしいと考えた。

■ iPad活用のポイント

話し合い活動で、相手に自分の調べたことや考えていることを伝える場面では、言葉よりも写真や図が適切な場面もある。iPadを使えば、その場で資料図を一斉配布することができ、写真や図などを簡単に拡大したりして、より細かいところまで見ることができることから、話し合いも深まると考える。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
大仏づくりは人々のために良かったのか？悪かったのか？ どうして、良い・悪いの意見がかみ合わないのか考えよう 今後、調べてみたいことを考えよう	一人調べをもとに、話し合う **資料を見る場面では、iPadを使って一斉配布し、拡大して分析的にみたりする。**	**拡大したりすることで、より分析的な視点を持たせることができる。これを活用して話し合いを深める場面を設定したい** 自分たちが出した意見は、天皇・農民など、いろいろな立場の人から見た考えの視点に立っているということに気付かせたい

■ 写真

6年生　算数科　「比とその利用」

和歌山市立教育研究所・雑賀小学校元教諭　岡本友尊

■ 本時の目標・概要

本時の学習は、等しい比があることを知り、その性質を調べることができることが目標である。前時までに、2つの数量の共通な基準を用いて比較することにより、等しい比があることを理解している。本時で取り扱う等しい比の性質とは、比の前項と後項に同じ数をかけたり、同じ数で割ったりしてできた比は、みな等しくなるということである。また、この関係を使って等しい比を見つけることも本時のねらいである。

■ iPad活用のポイント

同じ数をかけて等しい比を作ることは難しいことではないが、同じ数で割ることについての理解が十分でない児童も考えられる。比の前項と後項を同じ数で割るには、2つの数の公約数（最大公約数）を考えなければならないからである。また、１：２＝２：□のような等しい比の性質を利用した問題では、わかっている関係が前項どうしか後項どうしかを考えることが必要である。

このように、等しい比の問題をスムーズに解けるようになるためには、繰り返し問題を解いていくドリル学習が効果的であると考える。そこで、授業の残り10分をドリル学習にあてるようにした。

iPadを使ったドリル学習のメリットは、

○電源を入れるとすぐに使える。　○自分のペースで学習を進められる。　○問題の正誤がすぐにわかり、間違った問題を何度もやり直すことができる。　○教師が問題や時間を指定することができ、児童の進捗状況をパソコンで確かめることができる。　という点である。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
等しい比 ２：３と４：６の間にはどんな関係があるか調べてみましょう	２：３の両方の数に２をかけると４：６になる ４：６の両方の数を２で割ると2:3になる どちらも比の値が同じ	２つの等しい比の間には前項と後項どうしの代わり方の割合が同じであることを理解させたい。
６：１２と等しい比を作ってみましょう	３：6、２：４、１２：２４	どのように考えて等しい比を使ったのか説明させる
６：１２＝１：□ □にあてはめる数字を考えましょう	前項は６から１に６で割っているから、後項の１２も６でわって□は２	比をできるだけ小さな整数になおすことを「比を簡単にする」ということを知らせる
練習問題をしましょう	**Padでドリル学習をする**	**使用する問題や制限時間を予め設定しておく**

■ 写真

6年生　算数科　「かさを調べよう」

和歌山市立教育研究所・雑賀小学校元教諭　岡本友尊

■ 本時の目標・概要

児童はこれまでの学習で、長方形、三角形などの基本図形の面積を公式を用いて求めること、また、複合図形を基本図形の組み合わさった形ととらえ、公式を用いて面積を求めることができるようになっている。しかし、児童は曲線で囲まれた形の面積を求める際には、既習の求積公式を用いることができないと考えることもあろう。
本時は、琵琶湖の写真を見ておよその形が三角形と見られるようにする。児童の見方として、三角形以外のものも考えられるが、およその面積を求めるというねらいに照らせば、公式を用いて面積を求めることができる基本図形と見ることがよいという点にも気づかせたい。
また、面積の量感を豊かに持てるようにするために、私たちが住んでいる和歌山市のおよその形をとらえ、その面積を求める活動を取り入れようと考えた。

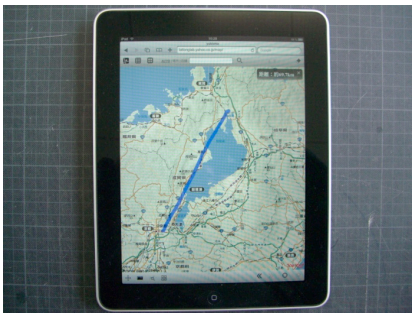
■ iPad活用のポイント

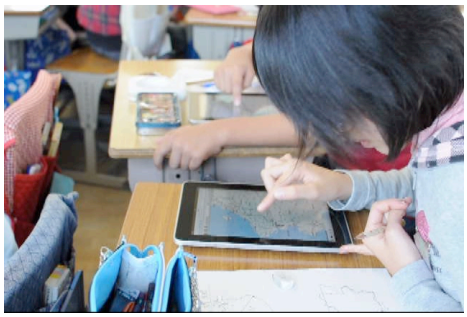
琵琶湖の形をおよそ三角形とみておよその面積を求める活動では、教師のiPadを実物投影機とプロジェクターで黒板に映し出し、求積に必要な部分の距離をyubichiz（ゆびちず）で測って見せた後、子どもたちにも使わせるようにした。和歌山市のおよその面積を求める活動では、およその形が台形であることを確認し、「上底・下底・高さ」にあたる部分をyubichiz（ゆびちず）で測らせた。また、測った結果を求積公式にあてはめて計算する際には、iPadに入れた電卓アプリを使う子どもの姿も見られた。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
琵琶湖の面積を求めるには琵琶湖の形をおよそどんな形とみれば良いでしょうか	琵琶湖の形について考える 三角形、四角形	ワークシートの琵琶湖の図に概形を書き込ませる 公式を用いて面積を求められる基本図形と見るのがよい点に気付かせたい
どこの長さがわかれば面積を求められるかな	底辺と高さ **yubichizを使って底辺と高さを測り、面積を求める**	**yubichiz（iPadアプリ）を使った距離の測り方を説明する。**
和歌山市のおよその面積を求めましょう	台形と見ればいい 上底と下底と高さを測ればいい **yubichizを使って上底と下底、高さを測り、面積を求める**	ワークシートの和歌山市の図に概形を書き込ませる

■ 写真





6年生　社会科　「明治維新をつくりあげた人々」

和歌山市立教育研究所・雑賀小学校元教諭　岡本友尊

■ 本時の目標・概要

２枚の絵をもとに、明治維新後の急激な変化のようすをまとめ、新しい世の中についての学習問題を作ることが本時のめあてである。本時の中心資料である２枚の絵の比較を通して時代の変化に気づかせていくようにする。

児童はこのような学習活動に活発に反応するが、ただ漫然とでなく、細かい点についても一つ一つ比較させながら読み取るようにさせたいと考え、まずは２枚の絵を見て気づいたことを自由に発表させながら、人物の姿や持ち物、周囲の様子といった調べる観点を決めた。その後、iPadに保存しておいた２枚の絵を見比べながら、その変化の様子をワークシートに記入させるようにした。活動を取り入れようと考えた。

■ iPad活用のポイント

２枚の絵を比較したり、友達の発表した内容を確かめたりする際には、画像をかんたんに拡大できる機能が大変有効である。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
２枚の絵を見て気づいたことをワークシートにまとめて発表しよう。 短い間に、まちや人々の様子が大きく変わったのはなぜだろう。 明治維新について調べたいことを話し合い、学習問題を作る。	**二枚の絵を比べて明治維新後の様々な変化を読み取り、発表する。** これまでに学習したことをもとにまちや人々の様子が大きく変わった原因について考え、話し合う。 新しい世の中について調べたいことを発表し合い学習問題としてまとめる。	わずか20年間に大きな変化が起きたことを理解させたい。 **iPadを活用しながらワークシートにまとめさせる。** 幕府や藩の衰え、新しい政治について考える人々の出現など、江戸時代末期の世の中の様子を想起させる。 江戸末期の世の中の動きを想起させる。

■ 写真

6年生　国語科書写　「筆使いと字配り」

和歌山市立教育研究所・雑賀小学校元教諭　岡本友尊

■ 本時の目標・概要

ひらがなの筆使いと文字の中心に気をつけながら書くことが本単元のめあてである。前時の学習では、文字の中心を意識しながら書くようにした。子どもたちは、ひらがなの始筆は軽く入ることや、丸みのある線で書くことは理解できたが、実際に書いてみるとその筆使いが難しいと感想を持つ子供が多かった。そこで、本時では、「ふれあい」の4字の中から特に筆使いに気をつけて書きたい1字を決めて取り組むこととした。

■ iPad活用のポイント

子どもたちのそれぞれの課題に対応し、4文字のそれぞれに、文字の真上から見たものと筆先の動きを大きく写したものの2種類の動画を用意し、iPadで見られるようにしておいた。筆使いの動画は教科書指導書CD－ROMのものを使った。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
「ふ」「れ」「あ」「い」の４文字で、ひらがなの筆使いの学習をします。 それぞれの今日の課題を発表してください。	前時の学習をもとに、それぞれが考えた本時のめあてを発表する。	教師が水書板に範書する
練習作品を見てみよう	**iPadの動画を必要に応じて見ながら練習する。**	iPadの「ビデオ」の中の筆使いの動画を必要に応じて見ながら練習するように指示する。
学習したことをいかして、硬筆で練習しよう	○○君の作品は、試筆が柔らかくなった □□さんの作品は、「むすび」が上手になった	めあてに沿って、作品の良くなった点を評価させたい

■ 写真

6年生　総合的な学習　「修学旅行に向けて」調べ学習

和歌山市立教育研究所・雑賀小学校元教諭　岡本友尊

■ 本時の目標・概要

修学旅行に向けて、調べ学習を進めている。子どもたちは図書館で資料を調べたり、インターネットの検索を使用したりして資料を集める。しかし、使われている漢字が難しく、意味がわからず困ってしまう子どももいる。そこで、グループごとに設定したテーマについて図書室で資料を探し、インターネット検索も同時に行いながらiPadの辞書アプリでわからない言葉を調べ、辞書のリンク機能を使って、さらに調べることを進めることも可能になるようにした。

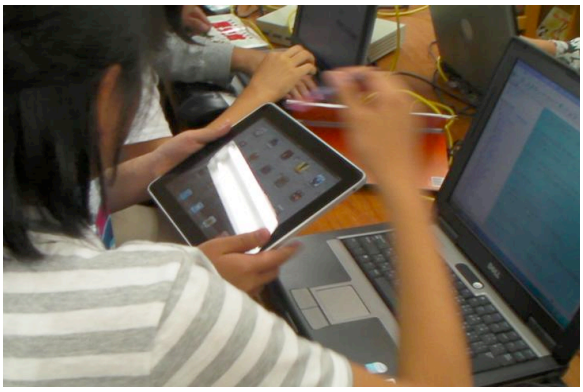
■ iPad活用のポイント

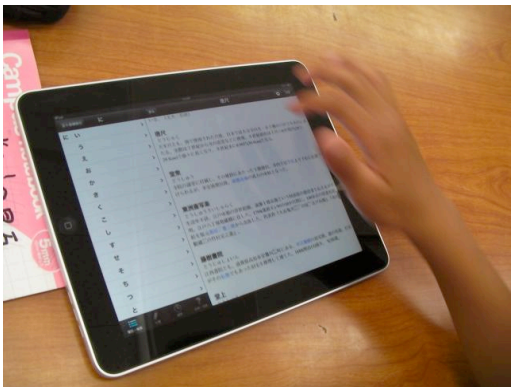
持ち運びも簡単で、キーワード検索やリンクからの検索ができるiPadの辞書アプリの活用をすることで、インターネットの言葉を調べたり、資料の語句を調べたりすることができる。また、リンクから写真を見たり、他の例を見たりすることもできるので、調べ学習をより円滑に進めることができる。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
グループごとに調べたいテーマに関連する資料を、グループ内で役割を分担しながら集めよう。 集まった資料を確認して、他に調べたいことがないかを話し合おう。 次の活動計画を立てよう。	グループごとに調べることの分担を確認し、調べ学習を始める。 **わからない言葉や足りない情報については他の子と協力しながら資料を読み取っていく。** グループ全員で集まった資料を確認しあい、ズレがないか、他に集めた方がいい情報がないか話し合う。 次回に行う活動をグループごとに確認し、活動予定を立てておく。	グループで役割を分担し、情報の確認をしながら幅広い情報収集ができるように、計画してから活動に入らせる。 本やネットの情報を他の手段でも同じ情報か確認させるようにする。 情報の整合性と相手が知りたいと思われる情報が他にもないかを考えさせる。 ワークシートに計画を記入させる。

■ 写真





5年生　社会科　「日本の地形の特色」

金沢市小坂小学校　小林祐紀

■ 本時の目標・概要

日本地図をもとに、国土の地形を概観し、大まかな特徴を理解することがねらいである。
日本地図（地形図）から国土の特徴について気づいたことをどんどんノートに箇条書きで記していく。
その後、グループ討議の場で意見交流を行い、学級全体での交流とつなげていく。
通常の地形図は立体感に乏しく、地図を読み慣れていない児童には、地形の特徴に気づきにくいと考えられる。そこでiPadでgooglemapを活用する。Googlemapを活用することでより立体的に認識できるだけではなく、より詳しく確認したいところ（平野の様子）なども鮮明に確認することができ、理解の定着が期待できる。

■ iPad活用のポイント

地図を拡大・縮小させながら地形の様子を確認していくことで、理解の定着とともに、グループ討議などで話し合い活動を支えるツールにもなり得る。

■ 展開

課題	学習活動	留意点
地形図を見て、日本の国土の特徴で気づいたことをノートにまとめましょう。	**iPadでgooglemapを活用して、地形の特徴で気づいたことをノートに箇条書きにしていく。**	**iPadでgooglemapを使うことで極めて細かい点に固執する児童がいるので、概観することの大切さを伝える。**
例）海沿いには低い土地が多いっていうけど本当かな。iPadを使って写真で確認しよう。	グループで意見交流を行う。**その際にも伝わりにくい点はiPadを見せながら説明する。**	グループ討議で分かりやすく伝える方法を考えさせる。
出された意見から、日本の国土の特徴をまとめていく。	全体での意見交流で明らかになったことをまとめていく。	社会の用語（南北に長い、山地が多い）などを使ってノートにまとめられるようにする。

高校2年生　情報A・英語Writing　「著作権を考える」

羽衣学園中学校・高等学校　米田謙三

■ 本時の目標・概要

著作権に関して自分たちで調べ相手に伝えることができるようにする。プレゼンテーション作成の前に著作権に関する授業を実施する。ねらいとして、「どんなものにも著作権があることを理解する。」「著作者、著作権、著作物の意味を理解する。」「著作権を守らなければならない理由と具体的に著作権を侵害している例を知る。各自の課題として下記４つに関してまとめる。

１　著作権とは何でしょう。
２　著作物にはどのようなものがあるでしょう。
３　著作物を自由に利用できるケースについて調べましょう。
４　著作物を使用する際に許諾を得るにはどうしたらよいでしょう。

プレゼンテーション作成は、これまでの番組から学んだことをふまえて「著作権」というテーマからで個人またはグループで焦点をしぼって自分の意見や考えをスライド4枚程度にまとめる。

　これを最終的に海外の生徒に向けて発信し、意見交換を実施する。

■ ICT活用のポイント

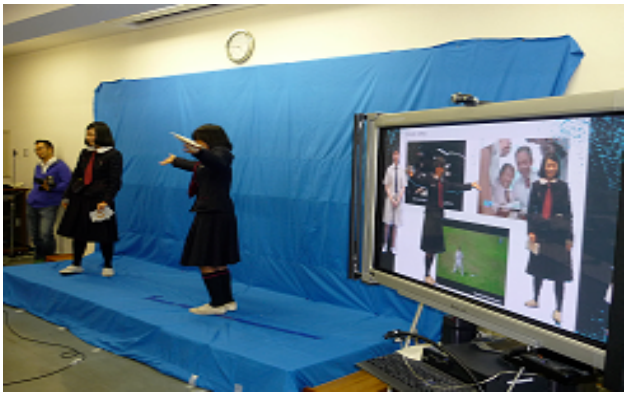
[1] 発表　作成したプレゼンテーションファイルを共有フォルダに提出する。小グループにわかれてグループごとで自分の意見や考えを発表する。聞き手は途中質問をしても構わない。番組だけではわかりにくい細かいところもプレゼンテーションを聞くことにより具体的でわかりやすくなる。プレゼンテーションソフトで段階的に説明することにより、理解を深めることができる。

[2] 海外へ発信　　英語版を仕上げた生徒から順番に電子情報ボードなどを活用してリハーサルをする。電子情報ボードの機能を活用してわかりやすく発表するようにする。拡大機能で見せることにより小さなところも大きく提示することができ、はっきりする。ポイントで、ラインマーカーや解説を書き込んだりして、わかりやすく説明やまとめをする。またそれぞれの作品について、どのような工夫を行い、いかに思考したかを発表してもらうことにより相互の学びあいを行う。まとめとして、まずは、海外へ作成したファイルを送る。また実際に海外の学校とビデオ会議を実施して情報交換を実施する。

■ 展開

課題等	学習活動	留意点
【導入】前回の復習。	・自分のワークシートを見る。	・デジタルメデイアのことを特に復習するようにする。
【展開１】10min.ボックス情報. 第14回の説明を見ながら内容を理解する。	・第14回のワークシートを記入しながら見る。 ・キーワードを押さえる。	・途中で番組をとめて答えの確認も適宜する。 ・語句の補足説明を実施する。 ・適宜解説を入れるようにする。
【展開２】 自分の意見や考えをプレゼンソフトでスライド4枚程度にまとめる。作成できたら、提出ファイルに提出する。	・自分の意見・感想を記入する。 **・イメージツリーやコンセプトシートを用いて作成する。**	・イメージを膨らませることのサポートと枚数は多くなく、見やすく作成させる。
【展開３】 グループ内、もしくは全体の前で発表する。 （評価シート記入）	**・２～４人一組となり、グループ単位でプレゼン発表をする。発表後、グループ内で議論しながら、お互いにテーマの理解を深める。**	・成果物を発表させることで学習の共有を図る。 ・共通点、相違点を見つけ思考力をつけさせる。 ・作業に困難のある生徒にグループで支援させる。 ・英訳の時間は、適宜指導する。制限時間内に完成させる。
【展開４】 英語に翻訳する。	・簡潔に英語でまとめる。	・各発表者のテーマを解説し、様々な考え方があることを指摘する。
【まとめ】 ビデオ会議の計画をする。	・将来の社会生活への影響を考えさせる。	・次回海外に発信することを伝える。

■ 写真



高校2年生　情報A・総合的な学習の時間
「リーフレットを作成する」

羽衣学園中学校・高等学校　米田謙三

■ 本時の目標・概要

リーフレット作成の取り組みは2003年度、小・中・高、合計9校500名ほどの子どもたちが地元のユネスコ協会と連携しながら取り組み、地域を巻き込みながら全国各地にさまざまな反響を巻き起こしました。2004年度以降、国際理解教育・福祉教育・平和教育・情報教育など、さまざまな思いを持った国公私立の小・中・高が参加しています。目標は３つあります。

１．未来を担う子どもたちが、現在世界が抱える様々な課題に向き合い、また様々な地域の文化や人々の暮らしを知ることができるようになる。また現在の日本での自分達の置かれている状況などを少しでも見つめることをできるようにする。

2.　子どもたちは、このプロジェクトなどを通して学んだことを日々の活動に生かし、周辺地域や海外でのイベントで発表するなど様々なボランティア活動に積極的に参加することができるようにする。

3.「自主的に活動すれば地域を動かせる」という実感とともに組織活動を展開させる。

2010年度も北海道から九州までカバーし、数名の小規模参加から百名以上の大規模参加、そして小学生・中学生・高校生と、各校種、学年がそろったダイナミックな全国組織の大プロジェクトになりました。ユネスコ協会やデジタルデザインの専門家の皆さん、地域の皆さん、参加校同士の交流など、人と人のかかわりの中での学びに、デジタル表現活動での学びを寄り添わせ、単独校の活動では得られないプロジェクトベースならではの課題追求学習のよさを実感して推進していくことができました。また、２００８年には大阪地区で高校生が主体となりアジア5カ国高校生国際会議を実施することができました。本校では特に海外との交流とコミュニケーション・プレゼンテーションに関して積極的に取り組んでいます。他地域の国際交流活動への参加や　文部科学省のユネスコ統括部との取り組みで土台ができているのでそれをうまく活用して実践を行うことを今年も考えています。

■ ICT活用のポイント

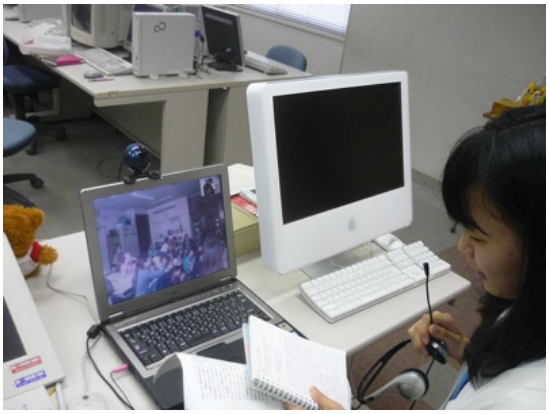
ユネスコの世界寺小屋運動のパンフレット作成を、総合的な学習や情報の授業などで実施するのに、昨年までのリーフレットの作品を電子ボードに示して良い点や悪い点などの考察を実施した。

また、作成したリーフレットのブラッシュアップを実施して、ブラッシュアップの前と後を簡単に振り返ることができるようにした。また自分の作成したリーフレットを電子ボードを使って発表することによって効果的な発表ができた。色合いがきれいであることやリーフレットの本物の感覚を拡大することによって示すことができた。細かい工夫を示すことができた。作品を連続して提示するときなどに効果的であった。

■ 展開

課題等	学習活動	留意点
・ユネスコ寺子屋運動について理解する。（1時間）	・ユネスコ協会によるゲストティーチャー授業を受けて世界寺子屋運動について知る。	下記３つの事に気付かせる。 ・識字、非識字とは何か。 ・非識字だと不都合なことは何か。 ・なぜ子どもや女性やアジアに非識字者が多いのか。 ・なぜ学校に行けないのか。 一方的な話や説明にならないよう、子どもたちが考え、問題意識を持つような授業デザインが必要である。
・運動の方法や内容、支援のしくみなど、具体的に世界寺子屋運動を自分でまとめながら興味関心を深め、自分に何ができるのか、運動への自分の思いを持たせる。（1時間）	・ユネスコ協会ｗｅｂサイトやビデオを利用して、世界寺子屋運動についてより詳しく調べて、まとめる。	下記の２つの事に気付かせる。 ・非識字者の人数や男女比、その推移 ・貧困のリサイクル 第１次の授業を振り返りながら、**データとして現状を押さえていくこと。**
・リーフレットの作成方法とその意味を理解する。（2時間）	・リーフレットの下書きを描く。	下記の４つの事に気付かせる。 ・何を伝えたいのか。 ・誰に伝えたいのか。 ・伝えたいことをキャッチコピーや写真でどのように表現するのか。 前年度までのリーフレットなどを参考として、自分なりのメッセージやデザインを持つ。 **・前年までのリーフレットを参考にして、必要な作成技術を学ぶ。（レイヤーの概念や、画像処理の方法など）** **・学校間交流や異年齢交流で、ビデオ会議や掲示板で相互交流を行う。** ・学級内での相互評価でも可能である。 **・お互いのリーフレットのよさや課題、伝えたいことは何かについて明確にする為のブラッシュアップに取り組むようにする。**
・思いが伝わりやすい表現についてトライ＆エラーで試行錯誤しながら創作を進める。（2時間）	・コンピュータでリーフレットを制作する。	
・作品の相互評価および交流の方法を理解する。（2時間）	・作品相互評価交流を行う。	
・自分たちの作品を活用してハガキを集めたり募金活動をすることにより社会に関わる	・実際の活動を行う。	・学校や学年の状況に応じてできる範囲で行う。

■ 写真



D-project公開研究会

配布物に掲載しきれなかった最新の指導案は下記のページにアップしております。

ぜひアクセスしてください。

http://www.d-project.jp/2011/iPad/index.html